学芸員の資質向上とネットワークの構築を通じた博物館の機能強化モデルの提言
～沖縄県内博物館の連携から見えてきたもの～

沖縄県立博物館・美術館　主任学芸員　山 﨑 仁 也

1．はじめに

沖縄県には、沖縄県博物館協会があり、県内の加盟機関は 55 を数える。しかし、そのうち自然史系の活動や展示を行う機関は 20 にとどまり、自然史系の学芸員・研究員の常駐する機関は美ら海水族館（沖縄美ら島財団）、名護博物館、東南植物楽園＆風楽風遊の森、北谷町立博物館（仮称･2019 年開館予定）、沖縄こどもの国、沖縄市立郷土博物館、琉球大学博物館（風樹館）、沖縄県立博物館・美術館、おきなわワールド文化王国・玉泉洞の 9 つしかない。さらにそのうち博物館と名の付く 5 館合わせても、自然史系学芸員は 6 名しかいない。144 万人を超える人口に対して 6 名というこの数字こそが、沖縄県民の自然史教育普及に対する関心の低さを端的に物語っているように思う。

また、沖縄県で日本博物館協会や全国科学博物館協議会（以下全科協）といった全国組織に加盟している館は 11 館にとどまり、博物館に関する本土の最新情報が伝わりにくい実情がある。例えば 2016 年に閣議決定された日本再興戦略によれば、文化財･文化資源のコストセンターからプロフィットセンターへの転換がうたわれ、学芸員や文化財保護担当者等に対する文化財を活用した観光振興に関する講座の新設等による博物館の機能強化が提言されている。もともと学芸員の職務の中核となる資料収集・保存、調査研究、教育普及、展示公開の力点バランスを平衡化し、外国人を含めた観光客にも手厚いサービスを提供し、「文化財で稼ぐ」仕組みへの転換を図る、という骨子である。研究者という性格を色濃く持つ学芸員にとってはなかなか素直に受け入れにくい部分もあるが、社会教育施設へのニーズが時代とともに変化することは避けて通れない。しかし、関連各機関の学芸員・研究員の個人的な努力による社会教育の発展には当然ながら限界がある。

このような現状のなか、昨年度より、沖縄県立博物館・美術館と国立科学博物館および沖縄県内協力館の連携により、博物館機能強化モデルの構築を模索する機会を得たので報告する。

2．沖縄における連携事業の概要

当連携事業は文部科学省委託「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」（以下レガシー事業）の一環である。そのうち、特定地域のレガシー発信のための同一地域の博物館等連携モデルの構築を目指し、沖縄で行われた連携事業はおもに（1）巡回展、（2）

研修会等の実施、（３）博物館外へのアウトリーチの３本柱である。字面では特に目新しさはないが、それぞれの内容には意義深いものがあった。

（1）巡回ミュージアム in 沖縄

沖縄の貴重な自然の財産と文化について触れる「琉球の植物」をテーマに、沖縄県内６館を巡回する展示会を実施した。2009 年と 2016 年に国立科学博物館で行われた「琉球の植物」展を基礎に、各館がそれぞれの地域や実施時期に合わせたアレンジを施し、基本となるパネル等は国立科学博物館が作製し沖縄県立博物館・美術館に輸送、同館を拠点として各館へ移動した。また、各館が展示に利用したいと希望した生体植物は沖縄美ら島財団が中心となって手配した。

〈表１　巡回ミュージアム in 沖縄　各館の実施状況〉

機関名称	実施時期	特徴
沖縄美ら島財団・海洋博公園熱帯ドリームセンター	平成 29 年 7 月 22 日～8 月 27 日	沖縄美ら島財団が日頃より行っている沖縄在来植物の保全、活用研究の強みを生かし、展示に生体植物をふんだんに取り入れた。基本パネルのほかにオリジナルパネルを 20 枚作成し、展示の厚みを持たせた。さらに、高校生、大学生向けに展示解説を行い、学習する機会を設定した。企画展内容を紹介した独自の図録を作製し、来場者へ配布した。
沖縄県立博物館・美術館	平成 29 年 9 月 8 日～10 月 15 日	同時開催の企画展「ウィルソンが見た沖縄」（有料）と「琉球の植物」（無料）の動線をつなげ、植物関連の展示を膨らませた。収蔵品の民俗資料、織物資料を利用し、展示の厚みを持たせた。
名護博物館	平成 29 年 10 月 27 日～11 月 19 日	基本パネルは希少種が中心だったので、環境ごとに身近な植物のパネル、標本等（特に名護市内天然記念物の樹木）を追加した。また、くらしと植物に関連する展示では、民具等の実物展示を多く展示した。
宜野湾市立博物館	平成 29 年 11 月 25 日～12 月 17 日	琉球列島の植物の特徴を紹介し、宜野湾市に生息する植物を紹介した。なかでも宜野湾市大山の田イモ畑に生息する主な水生・湿地生植物を紹介した。また、独自の図録を作製し、希望者へ配布した。
沖縄市立郷土博物館	平成 30 年 1 月 12 日～2 月 10 日	既存の収蔵品である沖縄市内で採集した植物の標本を利用し特徴的な植物を強調した。沖縄市の植生や外来種問題などのオリジナルパネルを作製する。昔から伝わる生活利用資料（竹、わらかご、繊維紐など）を活用する。（予定）
北谷町教育委員会（ニライセンター）	平成 30 年 2 月 19 日～3 月 2 日	北谷町立博物館（仮称）が 2019 年開館予定であるため、その広報も兼ねて、北谷町の自然を紹介するオリジナルパネル等を作製する。植物素材の衣装など、北谷町にある資料も活用する。（予定）

大学生への展示解説
（熱帯ドリームセンター）

資料を活用したトルソー
（宜野湾市立博物館）

展示の様子（名護博物館）

（2）研修等の実施による学芸員の資質向上

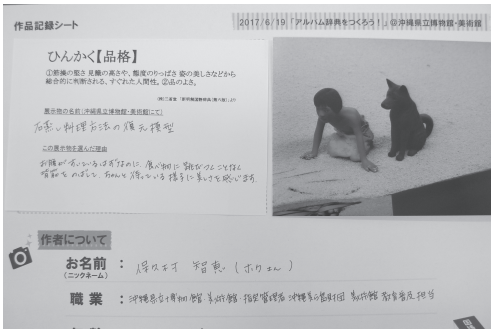
はじめに、で述べたように、学芸員・研究員の個人的な努力による社会教育の発展には限界がある。しかし互いのスキルを持ち寄って研鑽を積む機会は、意識して設定しなければまず訪れない。特に小さい博物館になればなるほど仕事は多岐にわたり、館外に出ることも難しくなる。ましてや本土の研修会用の旅費を準備するためには、多くの労力が必要である。

昨年度より、国立科学博物館の協力により、学芸員の資質向上につながる研修会をいくつか沖縄県で実施することができた。また、本事業の予算措置により、連携館学芸員等が本土で行われた研修に参加することができた。

〈表２　学芸員のスキルアップに資する研修会等〉

研修会名称	実施時期	主体	内容
サイエンスコミュニケーション入門講座	平成 29 年 2 月 1 日	H28 年度レガシー事業	自館の行っている教育普及活動を内容や対象年齢ごとに分類し、イベントマップを作成。現在の強みや今後の課題を整理。
アルバム辞典をつくろう！※	平成 29 年 6 月 19 日	国立科学博物館	来館者の目線で展示物を撮影し、ユニークなキャプションを作ることで固定概念を覆す。
鳥類剥製製作技術講習会※	平成 29 年 12 月 12・13 日	山階鳥類研究所	講師・岩見恭子氏指導のもと、鳥の仮剥製を製作。
標本作製実習（封入標本を中心に）	平成 30 年 2 月 1 日	H29 年度レガシー事業	昆虫の樹脂封入標本を作製しながら、他の種類の標本についても講義で学ぶ。
観光にかかる勉強会	平成 30 年 2 月 26 日	H29 年度レガシー事業	観光と博物館をテーマに勉強会。（予定）

※ここでは地域博物館の拠点としての当館の役割を果たした事例としてレガシー事業以外のものも含めた。



アルバム辞書研修の様子とその作品
（於　沖縄県立博物館・美術館）

（3）博物館外へのアウトリーチ～観光客へのアプローチ方法の模索

沖縄県立博物館・美術館の年間来館者数はここ数年 50 万人前後で推移している。来館者数だけを見れば県立の博物館施設としては十分成果を上げているといってよい。しかし沖縄県の観光客が昨年 860 万人を超えていることや、沖縄美ら海水族館が交通の便が悪いにもかかわらず年間 300 万人を超える来場者を迎えていることを考えると、まだのびしろがあるといえよう。

今回、沖縄のレガシーを観光客にも積極的に発信し、沖縄への理解を深めてもらい、ひいてはより充実した沖縄観光になるよう博物館として貢献できるような方法はないかと模索した。その一案として滞留時間の長い場所でのアウトリーチ展示を実施する予定である。

3．レガシー事業実施後総括

既に実施している（1）および（2）について、事業実施後の総括をしたい。

（1）巡回ミュージアム in 沖縄の成果

巡回事業を通じた博物館同士のネットワークの構築・充実という当初の目的は十分果たせた。もとより狭い沖縄で数少ない自然史系の関係者同士、資料の貸し借りを中心とした連携は成り立っていた。ただしそれは 1 対 1 の関係としての集まりでしかなく、今回のように連帯感や安心感を感じるものではなかった。資料の受け渡し拠点となることで、自館が終わった後でも他館で行われている展示に興味がわき、また、見に行くことで新しい視点を得られた。また、まだ開館していない北谷町博物館（仮称）の展示の際は、人手不足を他館で支援しようという申し出も自然に出た。そして何よりの成果は、今回コーディネート役だった国立科学博物館の手厚いフォローが期待できなくなる来年度以降も、県内の連携館同士で別の企画展（巡回展）をやりたいという意見が出たことだろう。

（2）研修等の実施により学芸員の資質は向上したか

研修を行えば、間違いなく参加者のスキルはアップする。また、関係機関の同じ職種の者同士の研修は、情報交換の場として大きな力を発揮する。研修を実施すると毎回感じたことだが、研修が終わってもなかなか参加者が帰らないのは、主催者冥利に尽きる。それほど日頃は情報交換の機会がないともいえる。研修の対象は博物館、大学、研究所、NPO、高校教諭など自然史系の教育普及にかかわる機関に限定しているが、ここまで３回の研修会参加者は博物館 34 人、高校教員６名、社会教育施設５名、大学･大学院生４名、研究所３名となっている。研修内容は主に学芸員向けとなっているが､キュレーターというよりエデュケーターの参加が多かった。

〈実施後アンケートの抜粋〉

- **市町村レベルの博物館では、個々の学芸員のスキル向上を意識しても県外での技術研修を受講する機会や時間、予算もなく、ある意味、館の状況に応じての独学がほとんどです。なので、このような研修会はとても新鮮でした。今後も展示技法や資料保存、展示資料のシステム管理などの実務的な研修の実施を期待しています。**
- **メリットが地域の博物館の学芸員に広く知れ渡れば、参加者も増えると思うし、実施し続けることに意味があると思うので、どんどんやってほしい。**

数値に表せないので評価は難しいが、今後もこのような研修を主催し続けることで、地域の博物館連携が促進され、博物館機能強化につながるだろう。

（3）博物館機能強化モデルの提言～まとめ

巡回展や研修会の実施により､地域の博物館機能が強化されることは間違いない。そのネットワークは、地域の特性を生かした新しい時代の博物館のあり方を模索する大きな力となるだろう。

４．おわりに

今年度実施している「巡回ミュージアム in 沖縄」では、琉球の植物という、沖縄の育んだ自然資源について、自然史の観点あるいは文化とのつながりの観点から、改めて県民や観光客に知ってもらうということを目的のひとつとした。県内の博物館が、こういった発信を継続的にしていくためにも、県内の博物館同士のネットワークや個々の学芸員の資質向上といった取り組みは今後も重要な課題となる。今回の一連の事業を契機に、県内博物館の活性化を図っていきたい。

なお、今回の連携事業は文部科学省委託「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承･発信事業」の一環として行われた。ご協力いただいた博物館及び関係機関とその担当者は以下の通りである。（敬称略）国立科学博物館：濱村伸治､國府方吾郎､一般財団法人沖縄美ら島財団：

天野正晴、阿部篤志、名護博物館：村田尚史、北谷町立博物館（仮称）：藤彰矩、沖縄市立郷土博物館：刀禰浩一、宜野湾市博物館：千木良芳範、平敷兼哉